



発行年月日 2019年 7月13日
発行者 日本作業科学研究会
ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

学術団体として認めてもらおうための活動

日本作業科学研究会 会長 吉川ひろみ

日本作業科学研究会設立から20年以上が過ぎ、大学院で作業科学の研究をする人も増えてきた。各大学は、学術レベルを維持するために、大学院での学位授与規定がより厳密になっている。学位論文として認められる研究であることを保証するために、日本学術会議に登録された団体が発行する学術誌への論文掲載を、学位授与の要件とする大学が増えてきた。そこで、当研究会も日本学術会議の登録団体の申請をしようとした。ところが、登録団体として承認される基準が変更されており、会員に占める研究者の割合が50%以上とされていることがわかった。日本作業療法士協会や作業行動学会が承認された時代にはなかった基準だ。このままでは、作業科学の研究論文があるのに、他誌に投稿し掲載されなければ、学位取得につながらないことになってしまう。これは緊急事態だった。

昨年度の会員数は200余名、研究者割合は20%に満たなかった。研究者とは、大学などの研究機関に所属する助教以上の職位にある者を指すそうだ。病院や施設で作業療法士として勤務する会員は、研究論文を学術誌に掲載した経験があっても、研究者としてカウントされないというのが、日本学術会議の立場だ。当会には、大多数を占める研究者以外の会員のための活動を考えてきた歴史もあった。100名以上の研究者の入会を得ることなど、到底無理だという意見もあった。

しかし、そもそも当研究会は作業科学の研究推進と学問的発展を目的としている。作業科学の研究を志して大学院に入学し、作業科学研究で学位を取得しようとする人が書いた論文が、「作業科学研究」に掲載されないという現状を放っておくことはできなかった。昨年10月、学術団体としての登録を目標にすると明言して、12月に4期目の理事に立候補し、会長になった。大学教員をしている知り合いへの年賀状に、「お願いがあるので、後で連絡します」という文を添えた。そして、まず知り合いの大学教員100余名に一斉にメールを送り、入会を依頼した。返信があったのは1名だったが、何名かは入会してくれた。しばらくして、個別にメールを送った。かなりの返信があり入会も承諾してくれた。職場の作業療法士以外の教員にも声をかけ、研究例をあげて作業科学の説明をし、研究者割合を増やす必要性を訴えた。すると内諾を得られた9名中6名がすぐに入会手続きをした。

驚いたのは、Zemke先生の行動力だ。海外の研究者や日本人の研究者（作業療法士と哲学者）に声をかけてくれた。フェイスブックでも本研究会の窮状を説明して入会を呼びかけ、

数名が入会した。うれしかった。

作業科学は魅力的な学問であることを再認識できた。作業療法士以外の研究者が参加することで、より一層彩り豊かな知見が得られると思う。

世界作業療法士連盟が、作業科学の声明書を最初に出版したのは2010年だった。そして2012年には改定版を発表し、作業療法の声明文においては、作業療法士が受ける教育の例の中に医学などと並んで作業科学が記された。

当研究会に、半数以上の研究者が所属することは、極めて道理に適っている。理事を始めとして会員の努力の結果、50名以上の研究者が新規会員となった。あと一息だ。

第22回作業科学(OS)セミナー報告

第22回 作業科学セミナー実行委員長 ボンジェ・ペイター

2018年12月8、9日、首都大学東京にて、「参加とコラボレーション～作業について共に学びあう～」を開催致しました。今回は、OS セミナー史上最多の…ではないものの、約210名もの参加者が集まり、一人ひとりが様々な形態で参加・コラボしながら、作業について共に学び合う場となりました。

1日目は、佐藤剛記念講演「“作業で支える”を実現する」(西野歩さん)から始まり、基調講演「変革的な学問：参加という根本的な形態の可能性と挑戦」(デッビ・ラリベテルドマンさん)と続きました。西野さんやルドマンさんの講演を通して、作業的不公正にある人々が、社会的な課題の中で、どのように参加していけるかについて学ぶことが出来ました。4名の方々による有意義な口述発表の後、今回初めてとなるキックオフシンポジウム「アジアの作業を促進するコミュニティ ACPO」(葉山靖明さん、Michael P. SYさん、Yeasir A.ALVEさん)が行われました。アジアの多様な文化の中で、作業的不公正状態にある人々の現状や参加に向けた実践について、様々な視点から学ぶことが出来ました。懇親会では、テーブルをOSにまつわる有名人ごとや、参加者の地域ごとに関わり、いくつもの新たな



Asian Community for the Promotion of Occupation のキックオフシンポジウム



懇親会：ルドマンさん@スピーカーズコーナー

なコラボレーションが生まれる機会となりました。また、参加者が自分の意見を自由に発信できるスピーカーズコーナーでは、お酒もはいたり、緊張から解放され、参加者全体と活発に意見交換が行われ、楽しい時間となりました。

2日目は、「ライブ・アクション・ロールプレイ (LARP) という意識向上を目的としたシリアス・ゲーミング方法：

「ひきこもり」についての LARP を例に」（ビョーン＝オーレ・カムさん）から始まり、実際にロールプレイを体験することで、その世界を理解、共感する方法を学びました。そのあとは、14 名の方々によるポスター発表が行われ、各ポスター前で熱いディスカッションが繰り広げられました。最後のワークショップでは、今回の学びを各々のフィールドでどのように活かすか？というトピックで、グループ内で意見を出し合いました。また、メンチメーターというアプリケーションを用いて、モバイルデバイスで発信された参加者一人ひとりの意見や、グループでの意見を、皆で共有し、講演者や参加者全員と結びつくことが出来ました。

ご参加下さった皆さまをはじめ、お忙しい中であるにも関わらず、講演を快く引き受けて下さった講師の皆さま、日本作業科学研究会理事の皆さま、そして、実行委員メンバー皆の「参加」と「コラボレーション」のおかげで、とても「meaningful」なセミナーとなりました。ありがとうございました。Dank je!



LARP の実際のロールプレイ

第5回 作業科学を実践につなげる研修会に参加して

東大阪病院 安田 友紀

2018年4月20、21日に大阪医療福祉専門学校で行われた第5回作業科学を実践につなげる研修会へ参加しました。まず西方浩一先生の講義では作業療法と作業科学のこれまでの歩みや両者の関係を、作業療法のルーツから現在WFOTが掲げる声明書まで様々な観点で詳細に解説して頂きました。作業療法を立ち上げた職種や作業が関与した歴史的出来事を知ること、私たち作業療法士が知っておかなければならない学問領域の広さを改めて感じることが出来ました。病院に勤務していると医学的知識を求められることが多いですが、作業療法士として必要な学問領域を学び続けること、対象者との関わりを通して作業の機能・形態・意味といった視点の理解を深めることの重要性を実感しました。

2日間の研修の大部分を占めたワークショップは、作業的存在とは何かについて考え、参加者と多くの意見を交わすことが出来た非常に有意義な時間でした。ビデオで視聴したある脳卒中後の男性から発せられる自己の存在や作業に対する言葉の独特さはとても印象的であり、そこに作業の多様性を感じることが出来ました。また、自分の作業について語るワークショップでは、『作業療法士』としてしか認識していなかった周囲の参加者を、個性溢れる作業的存在として認識することが出来、ワークショップ後には互いの距離が近くなったようにも思いました。これらを通して、対象者を作業的存在として理解するために、その人の用いる言葉や価値観をより大事にしたいと思える学びの多い機会となりました。

先日、33年ぶりに作業療法の定義が改訂されました。今回の研修で学んだ、対象者を作業的存在として捉えながら、その人らしい目的と価値を持つ作業に参加することを支援し続け、多くの人の健康と幸福を促進することの出来る作業療法士になりたい、と改めて感じた研修会でした。今後も作業に関する知識を更に深め、実践に繋げていこうと思います。

第6回 作業科学にまつわる研究法研修会 in 札幌医科大学

済生会小樽病院リハビリテーション室

作業療法課小樽臨床作業療法研究会 白井 美奈子

2018年6月16日・17日に札幌医科大学で開催された「作業科学にまつわる研究法研修会」に参加しました。

作業科学は、現在職場の勉強会や札幌OS勉強会で学びながら、臨床で活かせるようになりつつあります。そのような中、作業科学に関する質的研究にも興味を持ち、研究手法を学



びたいというのが参加の動機です。

研修会 1 日目は、主に作業科学研究の基礎知識について量的研究と質的研究の知識や研究方法についてご講義いただきました。配布資料には多数の文献リストがあり、自己学習に活用してきたいと思います。2 日目は作業科学の進め方、ワークショップを通して参加者とテーマに沿って研究の展開の仕方をディスカッションしていく内容で、新たな気づきや疑問などを自覚することができ、貴重な経験となりました。

懇親会は、私がスタッフとなって活動している小樽臨床作業療法研究会と作業科学研究会とが共同で「Learning Bar OS まなば Night」を企画・開催しました。さっぽろテレビ塔でお酒を飲みながら、酒井先生から「作業的存在って何？」という問いをいただき、それについて参加者個々が語り合いました。改めて作業的存在としての自分を振り返ることができ、ひととひとが繋がり、作業の輪が広がった場になったかと思います。

研修会を終えて、作業科学研究の基礎知識やグループワークによるディスカッションを通して作業科学研究の糸口を知る機会を得ることが出来ました。北海道で仲間が増えるよう自分自身の知識を深めること、それを周囲へ発信していけるように頑張りたいと思います。

今後におきましても、また「OS の聖地・札幌」で作業科学研究会主催の研修会など開催していただけると嬉しい限りです。

イムス札幌内科リハビリテーション病院 齊藤 雄一郎

2018 年 6 月 16 日～17 日に札幌医科大学で行われた第 6 回作業科学にまつわる研究法研修会に参加しました。

今回の研修会は私にとってタイムリーなものでした。というのも、私は修士課程に進むために研究計画書の作成に難渋していたのでした。

高齢期領域で働いている私は、クライアントと関わりの中で、その人の作業がより良いものになる為の貢献ができているのか？高齢者自身の個別性に沿ったサービスを提供できているのか？といったモヤモヤを抱えていました。そこで作業科学という学問に出会い、勉強

していくうちにモヤモヤしていた事柄に名前が付けられ、整理されて知識になっていく感覚を経験しました。この知識をさらに発展させ、まだ明らかにしていない事を明らかにしたいと思うようになり、修士課程進学を決意しました。

研究計画書の作成の過程で、私は「沼」にはまっています。自分の臨床疑問を研究疑問に変換し、言語化していくというプロセスは私にとって難しいものでした。先行研究を調べれば調べるほど、自分の知らない言葉や概念が出てきて「自分が知りたい事は何なのか」ということがわかりづらくなっていくように感じていました。

今回、2日目のワークショップに話題提供という形で、その時点まで作成していた研究の計画書の発表を行いました。幅広い領域で働いている参加者の皆さんとのディスカッションを通して、どうやら自分はあまりにも大きすぎるテーマを考えていたということがわかり、まずは前提の概念から段階的に明らかにしていくという今後自分がやるべきことの道筋が見えてきたような、「沼」から抜け出すきっかけをもらえたような気がしました。作業について深く考え、意見を交わし合える先人・同志・仲間が多くいるということがとても心強く感じました。この研修会を通して、これからさらに研究法や先行研究などの勉強を深めていくモチベーションがさらに高まる経験となりました。ご講演頂いた先生方、スタッフ、参加者の皆様に深く感謝いたします。





第7回作業科学にまつわる研究法研修会」の感想

東京警察病院 三村啓人

2019年5月25日、26日にわたり、杏林大学にて「第7回作業科学にまつわる研究法研修会」に参加させて頂きました。今回の研修会を受講したきっかけは、現在大学院で取り組んでいる研究を今後発展させていく上で、作業の視点を取り入れたいと思ったためでした。

1日目の「作業科学基礎講座」では、作業療法と作業科学の関係や作業科学の知識を臨床にどのように応用するかなどについて学びました。作業科学を学ぶことで対象者を捉える視野が広がり、より深く対象者を理解する上で有用な学問であると感じました。「研究法総論」では、一般的な研究の種類やプロセスを押さえた上で、作業科学研究についても複数の研究例を挙げながら、とても分かりやすく説明してくださいました。そして「質的研究法」では、作業科学研究の質的研究の特徴やどのようなプロセスで行われているのかについて学びました。これら2つの講義を通して、日常で感じる疑問を作業科学研究に落としこむまでの具体的なプロセスを指し示して下さり、もっと作業のレンズで日々の経験を洞察できるようになりたいと強く感じました。1日目の最後は、「作業科学研究文献の読み方」についてのお話を聞きました。研究論文に関するルールを知ることにより効果的に読めるということ、作業科学論文の実例を挙げて作業科学や作業療法との関連を読み解いてくださいました。

2日目は、2人の参加者から研究に関する話題が提供されてディスカッションを行いました。多くの参加者とディスカッションを行う中で、それぞれの方の疑問をリサーチクエストや具体的な研究のプロセスにまで踏み込んで話が発展していきました。多くの方の視点や価値観に触れる機会が持て、今後の研究にも繋がる貴重な体験となりました。最



後に、各々の研究計画立案のワークショップを行いました。大学院のゼミしながら、様々な領域に勤める作業療法士との意見交換を行うことができ、作業の視点で研究を始めるにあたり有用な示唆が得られたと感じました。

2日間にわたり大変濃い内容であり、まだまだ自分の中に落とし込めていない部分も多くありますが、今後の研究を発展させてく上で非常に有意義な時間でした。また多くの作業療法士と繋がることのできた貴重な機会でもありました。次もこのような機会があれば、ぜひとも参加したいと思います。

常善会リハビリテーション病院 赤坂竜一

今回の研修会のワークショップで私は話題提供者となり、「作業に焦点を当てた組織づくりのためには何をすべきか」というテーマで臨床疑問を立てて、それを研究に落とし込むプロセスを経験させていただきました。私が作業科学に出会ったのは臨床1年目の頃であり、作業に焦点をあてた実践をやりたいと思っていましたが、職場での風当たりは強かったです。そこで、上記のような疑問を持ちました。今回、講師の方々や参加者の皆さんとディスカッション出来たことで、明確に言語化しなければならない概念は何か、倫理的な配慮がある問題ではないか、そもそも「作業に焦点を当てた実践」の定義は何か、なぜ職場でそれが出来ていないと言えるのか、など、私一人では到底考えられなかった視点について、知見を頂くことが出来ました。現在はディスカッションした内容をもとに研究計画を修正し、インタビューで用いる手法の検討や、分析方法について知識を深めています。今までは臨床疑問を研究に落とし込む作業の難しさについて、何が難しいかも分からずに苦悩していましたが、今回、話題提供者として研修会に参加でき、研究をはじめの上で、どのような手立てで理論を組み立てれば研究となり得るのかを学べたことが最も大きな成果でした。作業について興味があり、それをもっと深めたいと考えている方には是非ともおすすめしたい研修会です。

第 23 回日本作業科学セミナー in 茨城

『変容する作業と未来～先端テクノロジーは 作業の何をどう変えるのか～』

事前登録受付中 (2019 年 10 月 31 日まで)

演題募集中 (2019 年 8 月 20 日 (火) 午後 23 時まで)

いずれも HP 参照 http://www.jssso.jp/courses_seminars.html

日時：2019 年 11 月 23 日 (土)・24 日 (日)

場所：茨城県立医療大学 (茨城県稲敷郡阿見町)

11 月 23 日 (土) 9:00～ 受付開始

午前：プレセミナー自主企画、開会式、口述発表

昼休み：昼食・日本作業科学研究会総会

午後：基調講演 「情報技術の進展に伴う「作業」の変化」 講師：荒川 豊 (九州大学大学院システム情報科学研究院)、フロアディスカッション・休憩、ワークショップ 「先端テクノロジーを生かした道具を用いた作業の開始ーパターンランゲージを用いてそのプロセスを探索するー」 講師/ファシリテーター：岡田誠 (認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ)

11 月 24 日 (日)

午前：「“Becoming acquainted” – an occupational perspective on the process of incorporating AT into occupations. “馴染んでいくこと”アシスティブテクノロジー (福祉機器類) を取り入れる過程における作業的見通し」 講師：Stina Meyer Larsen (Health Sciences Research Center/Department of Nursing and Occupational Therapy)、フロアディスカッション・休憩、ポスター発表

11:50～14:00 懇親会

午後：佐藤剛記念講演 「環境・社会・経済が織りなす持続可能な社会の実現 – 自然と人々の健康と作業に焦点を当ててー」 講師：青山真美 (一般社団法人 P&W 研究所 アイアム)、本セミナーの振り返り、閉会式、写真撮影

2018年度 第2回日本作業科学研究会理事会 議事録

2018年12月7日(金) 19:00~21:00

場所: 首都大学東京 荒川キャンパス 5階 590室

出席: 吉川、西方、小田原、近藤、西野、村上、渡辺、齋藤

欠席: 坂上、酒井、ボンジェ、堀部

【報告及び検討事項】

1. 総会運営

総会運営についての確認を行った。

吉川(会長)より学術団体登録のために、研究者として認定される会員(大学助教以上)を増やす方針が説明された。各理事が精力的に勧誘し、来年度初めに入会してもらい、研究者会員が50%を超えた時点で、即登録を行うこととする

2. 第23回 OS セミナー

大会長予定の齋藤から、茨城県立医療大学で開催を計画しているという報告があった。

3. 第24回 OS セミナー

2018年度 日本作業科学研究会 第13回 総会 議事録

1. 日時: 2018年12月8日(土) 12:30~13:15

2. 場所: 首都大学東京荒川キャンパス(東京都)

3. 議長団選出及び書記及び議事録署名人の任命

議長: 高崎友香(茨城県立医療大学) 副議長: 橋本 奈奈(けやきトータルクリニック) 書記: 中澤紀子(YMCA訪問看護ステーションピース)、山地早紀(里仁苑)
議事録署名人: 古山千佳子(県立広島大学)、

開催地を検討した

4. 機関誌編集班からの報告

第12巻し印刷・校正中12月中の発刊を目指す。第13巻のテーマは「参加とコラボレーション」。執筆要綱の参考文献において、「リボジトリ」の文献引用の方法を掲載。J-stage 掲載用研修会参加し、J-stage 掲載に向けた準備をしている。編集方針・査読方法を再検討していく。

5. 機関誌編集方針

編集班から編集委員等の提案があったが、次回理事会で編集方針等を審議することとした。

6. 学術団体としての申請

学術団体としての承認を目指した活動を2018年度(注. 2018年7月から翌6月末)に行う。団体として会員100名以上必要。内、研究者(助教以上)を会員の半数以上にする。それに伴い、研修推進班や実践につなげる班は研修会開催日程内容など再考する。具体的な行動指針は会長主導で行う。次回理事会にてさらに検討する。

高木雅之(県立広島大学)

4. 定足数報告

2018年12月8日現在の会員数(2018年度会費納入者)173名。総会成立のためには会員数の3分の1である58名の参加が必要。総会参加者59名、委任状提出42名、合計101名で総会が成立した

5. 議案と議事の経過

第1号議案 会則の一部改正の件

昨年度総会で承認された年会費値上げが具体的に、正会員の年会費を現行の2,000円から3,000円に値上げすることが提案された。理由は単年度の決算に赤字が続いてい

ることが挙げられた。→議長が議場に質問を求めたが、質問及び意見はなかった。その後議長が本議案を採決し、本議案は圧倒的多数の賛成を得て可決された。

第2号議案 2017年度(2017年7月～2018年6月)事業報告

各担当理事より2017年度事業報告が行われた。→議長が議場に質問意見を求めたが、質問および意見はなかった。その後、議長が本議案を採決し、本議案は圧倒的多数の賛成を得て可決された。

第3号議案 2017年度(2017年7月～2018年6月)決算報告・監査意見書

事務局(リハビリステーションうるまの虹・村上典子)より、2017年度決算報告を行った。また報告された内容について、監事(訪問看護ステーションブルーポピー 堀部恭代)より監事意見書に基づき監査の意見が報告された。→会員より単年度の赤字について丁寧な説明が要求された。会長の吉川ひろみより、523,355円の収入に対し、機関誌の印刷代が475,312円とおよそ9割を占めていることが説明された。その後、議長が本議案を採決し、本議案は圧倒的多数の賛成を得て可決された。

第4号議案 2017年度(2017年7月～2018年6月)事業計画及び予算案の件

各担当理事より2018年度の事業計画および予算案が報告された。→学術委員会研究推進班、実践につなげる班より、研修会の在り方について再検討していくことが報告された。→議長が議場に質問意見を求めたところ、会員より単年度で赤字決済となっていること、今後どのように改善していく予定か質問があった。会長より学生会員枠を設けたが会員数が増えなかったこと、年

会費の会計処理の方法から正会員260名に対し実際に会費を納めている会員は130名前後となっている現状の説明があり、今後は支出を減らすために機関誌を紙媒体ではなくオンラインジャーナルへと移行していく予定であると説明がなされた。その後、議長が本議案を採決し、本議案は圧倒的多数の賛成を得て可決された。

第5号議案 役員選任の件

2018年度役員選挙を実施、その結果、理事、監事ともに立候補者数が定数と一致したため、全員が無投票当選となった。

第6号議案 その他

1. 次期作業科学セミナー大会長承認の件
会長 吉川ひろみ(県立広島大学)より、次期(第23回)作業科学セミナー開催地として茨城県 茨城県立医療大学が、大会長として齋藤さわ子氏(茨城県立医療大学)が推薦された→議長が議場に質問意見を求めたが、質問および意見はなかった。その後、議長が本議案を採決し、本議案は圧倒的多数の賛成を得て可決された→第23回 作業科学セミナー大会長 齋藤氏よりセミナー開催日は2019年11月23・24日(または、12月14・15日)を予定していることが報告された。

2. その他

会長吉川より研究会の方向性について説明があった。作業科学を研究し論文を執筆している者が、学位認定の要件をクリアするため、学術団体として認められている団体が発行する作業科学以外のジャーナルに投稿している現状がある。本研究会が学術団体として承認されるには、研究会の会員の50%以上を研究者(大学助教以上)で占める必要がある。現状は18.8%となっており、

研究者の数を増やすことを当面の課題としている旨が説明された。

2018年度第3回 日本作業科学研究会理事会議事録

2018年12月9日(日) セミナー終了後～16:30

場所：首都大学東京 荒川キャンパス 5階590室

出席：吉川、酒井、西方、小田原、近藤、西野、ボンジェ、渡辺、齋藤、堀部、山根、中塚、港、若井、坂上 欠席：村上

【検討事項】

1. 担当理事と旧理事委員として活動の移行

会長：吉川・副会長：西野、西方・事務局：坂上、(委員：村上)・国際交流：小田原
機関誌：山根、ボンジェ、(委員：近藤)・研究推進班：小田原、中塚、(委員：渡辺、近藤)・実践につなげる班：西方、港、(委員：渡辺)・HP：西方、山根・研究会ニュース、SNS：西野・セミナー関連サポート：サポート理事はなし。大会長(齋藤)は理事会に参加する。

2. 理事会開催時の旅費について

本来、理事会参加のための旅費は出すべきだとの意見で一致。しかし、2年連続で単年度赤字が約20万円出ており、旅費規程を検討する。今回について旅費を支給するが辞退できる人は辞退することで了承。

理事会を単独で開催する場合の旅費については、今後検討することを確認。

3. 第23回OSセミナー

日程は、11月23～24日または12月14～15日。佐藤剛記念講義：検討中。

4. 日本学術会議の申請について

前回理事会により、2019年度日本学術会議へ申請する方向で準備を確認。

5. 機関誌について

機関誌の手順等を含めて研究会のあり方について意見交換した。機関誌編集班2名がJ-stage研修会を受講。J-stageへの掲載に向けて準備を進めることを確認。バックナンバーの掲載に関しては、まずは第11巻から載せる方針を確認。紙媒体の発刊に関しては、今後も継続審議する。

報告

新年度体制

会長 吉川ひろみ(県立広島大学保健福祉学部) 副

会長 西方浩一(文京学院大学保健医療技術学部)

副会長 西野 歩(煌めく返り花プロジェクト) 理

事・事務局 坂上真理(札幌医科大学保健医療学部)

理事 小田原悦子、中塚 聡(諏訪共立病院)、

ボンジェ ペイター(首都大学東京人間健康科学研究科・健康福祉学部) 港 美雪(就労移行支援事業



所 エール東海)、山根 伸吾 (広島大学大学院)

監事 堀部 恭代 (訪問看護ステーション ブルーポピー)、若井 亜矢子 (札幌リハビリテーション専門学校)

編集後記

皆様大変ご無沙汰してしまいましたこと、お詫び申し上げます。

総会にて理事の交代、学術団体を目指すための活動、臨時理事会など、理事は皆心を合わせ活動しています。

ニュースレターをお読みいただいた皆様、学術団体となるには、研究者が会員になることが必須です。同時に、私たち研究会にとって、研究者としての日々を過ごしていない会員も大切です。作業科学というコミュニティで、臨床に従事する作業療法士の力が日本のように大きい団体は、世界的にも稀有とのことです。今後も日本の世界の作業科学研究を作り上げている人たち、それを活用する人たちみんなで盛り上げてまいりましょう。

最後になりましたが、自然災害が毎年生じており、大変生活にご苦労されている方々が多くおられることと存じます。どうぞ健康な毎日と作業の連続が復活することを祈念しております。そして、それを支える皆様の健康も心からお祈りいたします。(西野)